巻頭エッセイ

とらえられないものを，とらえる人たち

岡本真由美

『ジーニアス英和辞典』第５版の追い込み作業の手伝いのため，湯島の編集部に来ている。殺気立つような真剣さでゲラ（校正刷り）と格闘している編集部の人たちを横目に，隅っこで細細と仕事をする。目の前のゲラには，「この語義の順序 OK？」や「この a は the では？」など，たくさんのコメントや提案が書かれていて，執筆者や校閲者がゲラの上で議論をくり広げている。辞書ってこうやって作られているのだ，とあらためて思う。高校生の時，参考書が嫌いだった私は，「辞書と心中するつもりで勉強しろ」とどこかに書かれた文章を読んで，「よし，辞書と心中してやる」と辞書だけが頼りとばかりに引きまくっていた。当時の辞書はあまり説明も詳しくなかったけれど，いくつかの語義と少しの用例や注記から，単語の意味や使い方を想像した。そんな辞書はこのようにして作られているのだ。

語義についている《英》表記のチェックをしていたときだ。clever を調べると，英国系辞書の多くではいくつもの語義に《英》表記がついていた（これは英国人の言葉だよという意思表示か？）。米国系の辞書を引いてみると clever の《英》表記はごく限定的にネガティブな語義にあるのみだ（こんな風に批判的に使うのは英国人だよという意見表明か？）。ふむ，clever って一般的な語のイメージなのにと思い，米国人の知り合いに clever を「利発な」という意味ではあまり使わないのかと尋ねると，不思議そうに「よく使うよ」と言う。インターネットをみると，米国人と英国人が clever の使い方を議論しているサイトがあったが，どうやら英米の違いはあまりないようだ。《英》とされていた clever は，よりユニバーサルに変化してきているのかもしれない。そのサイトに「BBC の TV 番組 *Doctor Who* では，Doctor が自分のことを clever と言うから，英国人のほうがポジティブな意味で使うのかも」という投稿があった。「英国人は自分のことを賢いなんて boastful なことは絶対言わない」という指摘に「Doctor は英国人じゃなかった，異星人だった」との返事があって，笑ってしまった。

そういえば，大学生の時，インド系英国人のゼミの先生はいつも “Be humble.” と言っていた。私が modest という言葉を使うと，英国人は humble を使うのだと直された。modest ではまだ足りない，もっと奥ゆかしく humble に，ということだった。もしかして humble にも《英》表記があるのかと調べるが，ついていない。誰よりも英国紳士であろうとした先生の言葉へのこだわりは，《英》の象徴のようだったのにとがっかりする。clever より《英》らしい気がしたのに，英米の言葉遣いの違いは難しい。

言葉が生き物だとは本当だ。国境などたやすく越え，人と時代の手によってダイナミックに変化していく。しかし，そんなとらえようのないものを，とらえようとする人たちがいる。辞書のほんの数行の中に，なんとかして言葉の今の姿を書ききろうとする，辞書の作り手たちだ。とらえてもまたすぐ変わり，生まれ，消えていく言葉の姿を辞書を通してなんとか伝えようとする。簡単なことではない。でも，辞書と心中しようと思っていた私の中の高校生は言う，「がんばって」。多くの読者に，辞書の作り手たちがとらえたものが届きますように。鬼気迫る編集者とゲラの山に埋もれて，そんなことを思った。

（おかもと　まゆみ・関西大学准教授）